

して平和に過ごしています。

軍隊生活一年、シベリア抑留生活三年、時には生死の境をさまよい、飢えと寒さ、重労働に耐えて、無事に帰ることができたのも今思うと不思議です。

いずれにしても、青春真っ最中の暗い悲しい軍隊生活、そしてシベリア抑留生活は、一体何であったのか。不幸にも抑留中過酷な重労働と飢餓と寒さや病気のため犠牲になった戦友は、故郷の土すら踏むこともできず、残念であったことでしょう。今もなお凍土に眠る幾多の御霊に対し安らかに、心から御冥福をお祈り申し上げます。

最後まで隠し通した戦友の形見の手帳は私物検査で没収され、遺族の方々に連絡も取れず大変残念至極です。

シベリアの地に渡り線香をと思っても、半世紀、時は流れて、体力の衰えもあり、今ではそれもかなえる事もできず、このような悲しみは我々経験者のみが知る事で忘れ去られてしまうでしょう。せめて毎年行われる慰霊祭にはできる限り出席いたすように心掛けて

おります。

戦争は不幸と悲しみだけを残した。

我が八十年史

東京都 関 口 健 治

現住所 東京都北区十条台

出身地 栃木県下都賀郡皆川村字新井

生年月日 大正九（一九二〇）年八月五日

家族構成 祖父・倉治、父・吉太郎、母・シヨ、兄三人、姉二人、弟一人、妹二人の四男

家業農業 田一町三段、畑一町二段（米、大麦、小麦、麻、葉タバコ、トウモロコシ、野菜類

等）

昭和十（一九三五）年三月 皆川尋常高等小学校卒業

四月 家庭金物御問屋 高木金藏商店入社

昭和十五年四月 徴兵検査 第一乙種合格

十月 横須賀海軍工廠

昭和十六年 三月 宇都宮東部三十六部隊入隊 重機

関銃隊配属

六月 一期終了後、北支那へ

部隊編成 興安県転属、独立混成

十五旅団編入

昭和二十年 八月 現地出發滿州移動

十月末 ソ満国境通過

十一月 ウランバートル着 抑留生活

昭和二十二年十月 ウランバートル発

十月末 ナホトカに着

十一月 函館港に着

十一月 我が実家に着

昭和二十三年三月 高木金藏商店に復職

昭和六十年 三月 定年退職

平成二年 四月 町会役員第一班班長

子たくさん家庭が多く、学校から帰ると勉強など
そっちのけで、家の手伝いやら、春はワラビ、ゼンマイ、
秋は茸など、夏は水遊び、タンパクの補充に魚捕

りと、何かと手伝いをしました。昭和五、六年頃は、
特に日本は不景気で、小農家の人達もペルーやブラジ
ルに移民し、安定生活を夢に見て日本を出て行ったそ
うです。その頃から滿州事変や支那事変など大事件が
次から次へと起こり、戦争に突入して、苦勞の始まり
です。

東京の日暮里に住んでいた叔父に連れられて、口添
えで高木金藏商店に、五年間勤める約束で住み込み、
商売の勉強を身につけることになりました。十
五年四月の徴兵検査で第一乙種合格となりましたが、
その後も高木金藏商店で商売に励みました。

ところが十月に徴用で横須賀海軍工廠に、軍艦の部
品を造るとの事で、初めはタガネの打ち方から。打ち
そこねて、左手の甲が腫れ上がり、ズキンズキンと一
夜寝られないときもありました。何かわからない部品
を製造、お国のためと一心不乱に、やっと慣れてきて
面白くなってきたなと思ひ勤めていると、昭和十六年
三月二十日出頭すべしとの召集令状が来て、早速宇都
宮東部三六部隊に入隊。重機関銃隊に配属、三八式小

銃の部品の名前から、分解組立が一応終了すると、今度は重機関銃の部品の名前、分解組立、はふく前進や、馬に振り分けて乗せたり下ろしたり、迅速に一秒でも早くしないと敵にやられると厳しくハッパをかけられながら、三カ月の一期教育終了。ホッと一息ついたところ、三日の外泊許可が出て、家に帰り、親戚や友達、近所の人にしばしの別れならよいのですが、永久に別れるかも。家族と別れる前の話等で一時の憩いを楽しみました。

直ちに外地行き、闇夜に乗船、どこかの港やら秘密に出発。翌日の日中デッキに出る許可があり、皆デッキから海原を見下ろすと、青くどこまでも透き通りクラゲの大群がフワフワと、元気でねと見送ってくれた玄界灘でした。

そのうちに海水が黄土色に変わり、ハシケに乗り移り、着いた所が草ボウボウの嫌な予感のする場所の上陸。トラックに乗せられ、今度着いた所で引込線の貨物列車に乗り移り、天津、北京を通過第一線に、独立混成十五旅団に転属、我が中隊は敵の真つただ中に、

食うか食われるかのにらみ合い。あの頃は日本軍が優勢のうちに過ぎていきました。

十六年十二月八日の宣戦布告をラジオで聞き、ヤッターと大喜びでした。それが十九年頃になると、制空権を敵にすっかり取られ、アメリカのP51戦闘機が飛来し、五十キロ爆弾を時々我が兵舎を目標けて落として行くので、何人かの犠牲が出るのです。我が軍がだんだん形勢不利になってきた、その頃の事件の一コマを。

ある日、我が中隊の先遣隊が部落の敵情況視察に巡回中、敵の大部隊と遭遇、我が軍苦戦との情報に、直ちに中隊より応援部隊が現地へ急行。戦闘の真つ最中、ビューダダダダ、プツ、と激戦。どうやら我が軍が有利になったと思うと、音が止んで敵はスーッと引き揚げてしまった。先遣隊の中に尊い犠牲者を三十人出していました。敵は武器、衣類など一切持ち去り、皆裸でころがっていました。夕闇が迫るころ、塹壕に草や木を積み重ね、その上に犠牲者を並べ、だびに付し、まんじりともしない一夜を過ごしました。

犠牲者の髪の毛、爪、骨の一部を包み帰って来ました。このとき私は、少年兵教育の少尉さんの当番をしていたので犠牲を免れました。その後も小競り合いが絶え間なく続きました。八路軍の作戦は巧妙で、味方に不利な戦は絶対避けて、有利なときは徹底的に攻撃して来るのです。敵地での我が軍はどうしても不利になります。

二十年八月、今度の命令は列車にて大移動で「遠くに行くのでは？」と想像していましたが、満州に行くことが後でわかりました。移動途中「ドカン」と鈍い音がして停止したので、外へ出て見ると列車が地雷を受け、三両目から四両脱線、車両が斜めに傾き、荷物車が二両、馬の貨車が二両のうち馬七頭と、馬当番と荷物当番の三人が下敷きになり、またも犠牲者が出てしまいました。至急列車を整え、山海関、新京（長春）を通過し、小さな駅に停車中、当日十二時に重大ニュースがあると駅前の広場に集合、ラジオから大皇陛下の悲痛な声で「堪えがたきを堪え忍びがたきを忍び」との終戦のお言葉に、皆その場にへなへたと座り

込んでしまった。そのまま我が部隊は行動を共にする事になる。しばらくして、皆ガヤガヤと、停戦だ、敗戦だ、と話し合っていたが、雰囲気では敗戦と納得、ソ連軍が武装解除に来るまで待つことになりました。

いよいよ武装解除に、紺の袋を斜めに肩から背中に下り下げ、銃を持ち貧弱なソ連軍を見てがっかりしたが、負けたのではと、兵隊にあげて指図され、「銃はそこへ」と、手首や胸をきよろきよろ見て、万年筆、時計などを取り上げられ、武装解除が終わると、ダモイダモイと追い立てられて、いよいよ列車で北へ北へと向かい、黒龍江を渡るころはもうすっかり冬で、寒さが厳しくなり、川も一面に凍りつき、木材で簡単にそりを造り、荷物を乗せ渡り始めると、ソ連軍も我々が満州に残したあらゆる物資をトラックでどんどん運んでいるのが見えた。

ソ満国境を渡り、しばらくして貨物列車に積み込まれ、西へ西へと寒さに震えながら移動。途中で薪を割って積み込み、行く先も知らされず、食事もひもじくなり、何日か過ぎて引込線に着き、列車から降りる

と、日本兵に似た兵隊と私どもを十列に並べ数え始めた。それはモンゴル兵でした。

夜行軍で上り下りの砂ぼこりの道を、疲れ果てふらふらになりながら、闇夜を無我夢中で、皆、黙りこくって、やっとの思いで、とある土地に着きました。

もう三十センチほど積もっている所を除雪し、モンゴルの独特のフェルトの丸い組立式の家が一時間ほどで出来上がり、その夜は放射状のようになって寝る。次の日は早朝から中国人の通訳の案内で間伐材の仕事で、印を付けた木を切ることになり、その日はなんの事もなく終わる。

この伐採が一カ月程続き、松の実など取って生で食べたり、その後、半地下の収容所に合流し、建築材料にするレンガ造りから、土台にする石切り、砂掘りなど、ここでは石切りのノルマのことを申し上げます。

山の中腹の上土を取り除き、岩石の横筋の目を見定め、そこにタガネを打ち込み、ハンマーで縦四十センチ、横三十センチ、厚み十センチほど打ち割り、麓まで下ろし何立方メートルかに積み上げることが、ノル

マに達しないと残され、出来るまで打ち割らなければなりません。遅くなると黒パン少々と雑草の雑炊では力が出なくなり、なんとか勘弁してもらいました。とにかく、レンガ造り、砂掘り、伐採など、力を必要とする仕事は、この食事では苦勞が絶えません。

木材のいかだをばらし陸上げするのも、寒い国の木材は年輪が狭く、そのうえ濡れているので重く、一本の木材を両端に輪にしたロープでつり上げ、丘の上のトラックに積むのですが、肩に食い込み、ピシっとして事に当たらないとふらふらして、運び出すのが大変でした。

キャベツの苗植えは、二十人ほどずつのグループに分かれ、葉が五枚ほどになった苗を土盛りした所に三十センチくらいの間隔に植えた後、根元に水やりをします。畝の間の溝にも水やりをします。その後は毎日見回りをして水をやり、大事な事は、植えたキャベツのしんを青虫があちこちで食いちぎるので葉がしおれているのです。そこで根元を掘り起こしてちゅっかり丸くなって隠れている虫を見つけて踏みつぶし、その

後にまた新しくキャベツを植え替えながら、この仕事を十日ほど続けました。

なお、広い草原での草刈りは、お化けのような大きな鎌で右から左へと扇形に刈り込み、初めはこれは大した事がないと思いつつ続けているうちに横腹と腰が痛くなり、何事も仕事となると大変だなあと思えます。刈った草はそのまま散らして乾燥するまで待ちます。

零下三十度、四十度の酷寒の地で重労働のノルマに追い立てられ、苦闘の連続です。

私どもの小隊では、朝皆起床したのに一人起きない、「オイどうした」と声を掛けても返事がない。すでにあの世行き。栄養失調で犠牲になってしまった。

ジャガイモの種植えのときは、監視兵なしで、植え方を教えてどこかに行ってしまった。馬にくわを引かせ、一筋の溝を掘り、その後からジャガイモ苗を三センチくらいの間隔に落としていく。そこに別の馬で土掛けする。このようにして二回も往復すると昼になります。土からはみ出したジャガイモは時々失敬して

食料の足しにした。

ここでは私が炊事の当番でした。満州からの戦利品のお米ではなく、もみ、そばの実、小豆。もみ、そばの実はこのままではとても食料にはならない。思っていたのが薪の中の特別太い丸太を立てて、その真ん中に火を起こし、だんだん丸く焼き、臼を造り、穀を取り、やっと雑炊にすることができました。小豆も、少ない岩塩の配給から、思い切って塩をきかせ、小豆粥にして夕食を楽しくいただきました。なお、薪がなくなっても配給がないので、牛の乾燥した糞を布袋に拾い集めて薪にしました。これは灰がたくさん出るので厄介でした。牛糞を集める最中に目についた松茸に似た白いキノコが、牛馬を囲う古い枕の元にあちこちに生えているので、一本割って味わってみると、なんとなく甘い味と香りで、これは食べられるぞと、夕食に最初は少量入れて試してみました。誰も何も言わないので、次の日からどんどん入れて食しました。大変おいしいと大評判でした。雑草から、犬、猫、狼にのど元と尻を食いちぎられた馬、小川にいるドジョウに似

た魚など、あらゆる物を栄養補給に雑炊に入れて、何としても日本に帰るまで、しのいでいかなければならない。

敵寒にフェルトの長靴とトナカイの毛の荒い外套が支給されました。風呂なし、シャワーは年二回、虱の消毒も二回、それ以外は、自分で体は水洗い、衣類は洗濯して清潔にしないと、敵寒では凍傷になり、足、手の指を切断した人も出ました。労役は向こうの言うがまま、私どもの部隊は小部隊でしたので、あちらこちらと引き回され、何かいろんな半端仕事が多かったように思います。朝夕の点呼、作業場の往復は、監視よりほとんど場所案内です。もっとも、こちらの方が仕事は上ですから。

モンゴルでは洗脳教育はなし、収容所は自主管理が主で、私物検査も二回ほどでした。労働以外の情報は得られず、移動はほとんど徒歩でした。

はや二年ほどになってくると、トラック移動に、どこに行くのか、帰れるのか、思いめぐらしているうちに、列車の引込線に着きました。前に見たような所

す。新だきのストープのある有蓋列車に乗り込み、今度には東へ東へと走る列車に、帰れるのではないかと身の内でも思いめぐらしていました。シベリアは寒さが心の中まで身にしみるが、なんか心が浮き浮きするので。小さい窓から外を見ると細かい粉雪が斜めに風に吹き飛ばされ、いかにも寒く身震いする思いです。やはりナホトカに着きました。もう大部隊が先着していました。これは順番待ちだなあと。後統部隊も集まって来ています。次々に舞台のある広場いっぱい兵士を集め、共産教育に洗脳された初年兵がおりたて、意地悪をした上官たちを舞台の上につっ張り出し、つるし上げ、平身低頭謝らせる儀式みたいなことをして通過しました。

二十二年十一月、ますます寒さ厳しくなってきたナホトカ港より、日の丸のついた船に乗り、これで本当に帰れるとホッと一息つきました。

帰りの船内で、乗船する前に行った洗脳儀式の、今度は反対につるし上げをするグループがいましたが、嫌な気分でした。

私どもは函館港に上陸、いくばくかの金銭をいただき、七年ぶりに我が実家の敷居をまたぎ、それこそ、やっとの思いで帰ることができました。十一月二十日頃でした。

夕食に白い御飯を出され目の前にしたときは、とめどもなく涙が頬を伝わってきて仕方がなかった。そのうえ、今夜は畳の上で寝られると思うと天にも昇る思いで、胸に込み上げてきて色々思い出され、よくも生き長らえてきたなと感慨深い思いでした。

実家で半年ほど農業を手伝いながら休養した後、いつまでも遊んでいるわけにはいきませぬので、戦前勤めていた会社にと上京し、前の住所に行くと焼け野が原で、どこへいったのか思案投げ首。はっと思いついた、戦前お使いなどで三回ほど行った事のある市川市八幡の別荘に行き、「今日は」と大きな声で一言申しますと、奥から出て来た懐かしい奥さま「アーラ」「ケンドン」、小僧のころこのように呼ばれていた。よく帰ってこられたわね、と早速座敷に通され、話は尽きませんが、働きたいと申しますと、「明日からでもど

うぞ」とのことと、住み込みで早速次の日から東京の日本橋に焼け残った店に出勤する事になりました。働けるのでまずは一安心、頑張るぞと早速商売に精を-outしました。

商売の品は家庭金物卸問屋です。品物があれば飛ぶように売れるので、毎日が楽しく、二割、三割と掛けてもどんどん売れました。社長も仕入れに飛び回っていました。

上京してから二年ほどして、四畳半の部屋を借り、生活をするようになりました。朝晩の食事の支度が大変でした。水道は共同で、ガスは通っていないので七輪で火を起こし、御飯と味噌汁を作り、食事にやっとなりつけるといふことで、今のよう便利な生活は本当にうらやましい限りです。

二十九年正月結婚、その後子供が生まれることになり、今までのところが狭いので、六畳と三畳にお勝手の家屋を三十五万円ほどで購入移り住み、女兒が生まれ、私も一人前の男になったかと、朝早くから晩の十一時ごろまで、一生懸命に働き続けました。

五十三年三月に、長年にわたり金物業の職務に精勵し多大の業績を上げたといふことの苦勞に對し、都民を代表して東京都知事美濃部氏より感謝状をいただいた事もありました。

六十年三月、月日の経つのは早いもので、私も定年退職が来てしまった。その後も六年ほど勤めました。これからは、本当の第二の人生で、自由気ままな生活をすることにしました。今の元氣な時に外遊をしよう、ハワイ行きから、アメリカ西海岸、オーストラリア、カナダ、香港、ヨーロッパと楽しく旅行し、バスボートを二冊使いました。外遊中私の心に残ったカナダの雄大なとがった山々、それに自然な彫刻のコロンビア氷河、コバルトブルーの湖、豊富な水のナイアガラ瀑布、舟で滝壺の近くに行くと吸い込まれそうになり、ヒヤッとする思いのスリルを味わって来ました。その後、北区のソ連抑留会に入り、ソ連での過酷な抑留生活で働いた何分の一でも補償してもらえたらと思いましたが、始めたのがちよつと遅かったので、ブル以前ころから奔走していたら違った結末になった

かもしれない。でも皆様よく色々と話合つて交渉していただきお礼申し上げます。

今はまた、元氣ですので、北海道から九州まで、あちらこちらと小旅行を一月に一回と楽しんでます。スイスにも箱庭のようなステキな景色が大変多く見られました。日本にも素晴らしい所がまだまだ多く見られますので、これからも大いに出かけたいと思ひます。

また、町会の役員になり、班長や衛生部長をやりました。その他、日赤の役員、国勢調査、商業調査、商業統計調査、北区の区政モニターなどなど、いろいろ勉強させていただきました。今は老人会に籍を置き、カラオケ、民謡、社交ダンスなど、趣味やクラブなどを楽しむ今日このごろです。

二十一世紀に向けて望む事

○戦争を永久になくす事

○地球から核を廃絶する事